

形式体系を用いた証明法の比較

2017SS025 神川留奈

指導教員: 佐々木克巳

1 はじめに

3年次のシステム数理実習の授業で、証明文を形式体系における証明図を用いて表現できることを知り、多くの証明文を証明図で表現してみたいと思った。本研究は、1つの命題には、複数の証明法で証明できる場合もあることに注目した。本研究の目的は、複数の証明法で証明できる命題に対し、その証明法による証明図を比較し、各証明法の理解を深めることである。具体的な証明法は、背理法を用いた証明、対偶の性質を用いた証明、どちらも用いない証明などである。そして、比較は、どれが分かりやすい証明であるか、発想がしやすい証明であるか、簡潔な証明であるかなどの視点で行う。また、形式体系はシーケントに基づく体系を用い、証明図はシーケント体系の証明図を用いる。

本研究では、19個の命題の証明を考察し、その代表的な7個について、考察をまとめた。本稿では、その7個のうち2個について述べる。2節でシーケントと証明図を導入し、3節でその2個の考察を行う。

2 シーケントと証明図

この節では佐々木[1], [2]に従い、シーケントと、その変化の過程を表す図式(証明図)を導入する。

2.1 シーケント

$n+1$ 個の述語 P, P_1, \dots, P_n に対し、表現

$$P_1, \dots, P_n \Rightarrow P$$

をシーケントという($n = 0, 1, 2, \dots$)。" P_1, \dots, P_n " をこのシーケントの左辺、 P を右辺という($n=0$ のとき、左辺は空列を表す)。シーケントの左辺において、述語の重複と順番は、異なっても区別しないとする。たとえば、次の3つのシーケント

$$P_1, P_2 \Rightarrow P \quad P_1, P_1, P_2 \Rightarrow P \quad P_2, P_1 \Rightarrow P$$

はすべて同じとみなす。シーケントの意味は、「左辺に現れる述語から右辺の述語が導かれる」である。証明の構想においては、左辺が「使える性質の列」、右辺は「導きたい性質」となる。本研究では、次の記号を適宜用いる。

\perp (矛盾), \wedge (かつ), \vee (または), \neg (否定)

また「 x は有理数である」を「 $x \in \mathbb{Q}$ 」と表す。

2.2 証明図

証明は推論を繰り返し構成される。故に、証明における各推論をシーケントの変化で表現できれば、証明もシーケントの変化で表現できる。以後、 n 個のシーケ

ント S_1, \dots, S_n からシーケント S への変化を

$$\frac{S_1 \cdots S_n}{S}$$

と表現し、これを推論規則という。各 S_i をこの推論規則の上式、 S を下式という。2つの推論規則 $\frac{S_2 \quad S_4}{S_1 \quad S_3}$ の下式 S_1, S_3 が別の推論規則 $\frac{S_5 \quad S_6}{S}$ の上式 S_5, S_6 とそれぞれ等しいとき

$$\frac{\frac{S_2 \quad S_4}{S_1 \quad S_3}}{S}$$

のように上に積み上げることができる。正しいと認められた推論規則を積み上げていき、正しいと認められたシーケントに到達した図式を証明図という。本研究で正しいと認めた推論規則の例をあげる。また、整数や演算の性質などで一般的に正しいと認めているものは、本稿でも正しいと認めることにする。ここで、(RAA)は背理法を表す。

$$\frac{P, \Gamma \Rightarrow R \quad Q, \Gamma \Rightarrow R}{P \vee Q, \Gamma \Rightarrow R (\vee \text{左})} \quad \frac{\Gamma \Rightarrow P \quad \Gamma \Rightarrow Q}{\Gamma \Rightarrow P \wedge Q (\wedge \text{右})}$$

$$\frac{\Gamma \Rightarrow Q}{P, \Gamma \Rightarrow Q (w \text{左})} \quad \frac{\neg P, \Gamma \Rightarrow \perp}{\Gamma \Rightarrow P (RAA)}$$

$$\frac{\Gamma \Rightarrow P \quad \Gamma, P \Rightarrow Q}{\Gamma \Rightarrow Q (cut)} \quad \frac{Q^*, \Gamma \Rightarrow P^*}{P, \Gamma \Rightarrow Q (\text{対偶の性質})}$$

証明図を簡潔に表現するために、証明図の各推論規則において、上式の左辺では下式左辺の部分列を“ \uparrow ”で表してもよいとし、上式右辺と下式右辺が一致する場合、上式右辺を“ \downarrow ”で表してもよいとする。また、証明図における(w左)は適宜省略する。

3 証明の考察

この節では、この研究で対象とした命題のうち、[3], [4]から抽出した2つの命題に対して、その複数の証明の証明図を与え、比較・考察する。具体的には、

- (1) 命題の記号表現
 - (2) 証明図(複数)
 - (3) 比較・考察
- の3つを示す。

命題1([3]).

(1) 記号表現: $a \in \mathbb{Q}, b \in \mathbb{Q}, a+b\sqrt{2}=0 \Rightarrow a=b=0$

(2) 証明図: 3つの証明図を示す。本研究では、この3つの他に対偶の性質を用いた証明図も考察したが、考察の

結果は次の命題と同様であるため、本稿では扱わない。

(2.1) [3]の証明を図式化した証明図:

$$\begin{array}{c}
 \frac{\frac{\uparrow, \sqrt{2} = -\frac{a}{b}, -\frac{a}{b} \in \mathbb{Q} \Rightarrow \perp}{\uparrow, \sqrt{2} = -\frac{a}{b} \Rightarrow \downarrow}}{\uparrow, b \neq 0 \Rightarrow \perp} \\
 \frac{\uparrow \Rightarrow b=0 \text{ (RAA)}}{\uparrow \Rightarrow b=0 \text{ (RAA)}} <1> \\
 \frac{a \in \mathbb{Q}, b \in \mathbb{Q}, a+b\sqrt{2}=0 \Rightarrow a=b=0 \text{ (cut)}}{\uparrow, a=0 \Rightarrow \downarrow} \\
 \frac{\uparrow \Rightarrow a=0 \quad b=0 \Rightarrow b=0}{\uparrow, b=0 \Rightarrow a=b=0 \text{ (}\wedge\text{右)}} \\
 <1>
 \end{array}$$

(2.2) 一番上で背理法((RAA))を用いた証明図:

※<1>は(2.1)の証明図と同じものとする。

$$\begin{array}{c}
 \frac{b \in \mathbb{Q}, b\sqrt{2} \in \mathbb{Q}, b \neq 0 \Rightarrow \perp}{\uparrow, b\sqrt{2} \in \mathbb{Q} \Rightarrow b=0 \text{ (RAA)}} \\
 \frac{\uparrow, b\sqrt{2} = -a \Rightarrow b=0}{a \in \mathbb{Q}, b \in \mathbb{Q}, a+b\sqrt{2}=0 \Rightarrow b=0} <1> \\
 \frac{a \in \mathbb{Q}, b \in \mathbb{Q}, a+b\sqrt{2}=0 \Rightarrow a=b=0 \text{ (cut)}}{a \in \mathbb{Q}, b \in \mathbb{Q}, a+b\sqrt{2}=0 \Rightarrow a=b=0 \text{ (cut)}}
 \end{array}$$

(2.3) 一番下で背理法((RAA))を用いた証明図:

$$\begin{array}{c}
 \frac{b \in \mathbb{Q}, b \neq 0, b\sqrt{2} \in \mathbb{Q} \Rightarrow \perp}{\uparrow, b\sqrt{2} = -a \Rightarrow \perp} \quad \frac{b \in \mathbb{Q}, b \neq 0, b\sqrt{2} \in \mathbb{Q} \Rightarrow \perp}{\uparrow, b \neq 0, b\sqrt{2} = -a \Rightarrow \perp} \\
 \frac{\uparrow, a \neq 0 \Rightarrow \perp}{\uparrow, a \neq 0 \vee b \neq 0 \Rightarrow \perp \text{ (}\vee\text{左)}} \\
 \frac{a \in \mathbb{Q}, b \in \mathbb{Q}, a+b\sqrt{2}=0 \Rightarrow a=b=0 \text{ (RAA)}}{a \in \mathbb{Q}, b \in \mathbb{Q}, a+b\sqrt{2}=0 \Rightarrow a=b=0 \text{ (RAA)}}
 \end{array}$$

(3) 比較・考察:(2.1), (2.2), (2.3)は、どれも背理法を用いた自然な証明を表しているが、それを用いるタイミングが異なっている。つまり、背理法は、自然に用いるタイミングが複数あるとわかる。その複数のタイミングの中で、自分の解きやすい方法を見つけ出して証明することができ、使いやすいと考える。

命題 2([4]).

(1) 記号表現: $\Gamma, a+b\sqrt{5}=c+d\sqrt{5} \Rightarrow a=c \wedge b=d$

ただし、 Γ は列 $a \in \mathbb{Q}, b \in \mathbb{Q}, c \in \mathbb{Q}, d \in \mathbb{Q}$ を表す。

(2) 証明図:3つの証明図を示す。

(2.1) [4]の証明を図式化した証明図:

$$\begin{array}{c}
 <2> \\
 \frac{<1> \quad \uparrow, a \neq c \Rightarrow \perp \text{ (等号の性質)}}{\uparrow, b \neq d \vee a \neq c \Rightarrow \perp \text{ (}\vee\text{左)}} \\
 \frac{\Gamma, a+b\sqrt{5}=c+d\sqrt{5} \Rightarrow a=c \wedge b=d \text{ (RAA)}}{b \neq d, \sqrt{5} = -\frac{a+c}{b-d}, \sqrt{5} \in \mathbb{Q}, -\frac{a+c}{b-d} \in \mathbb{Q} \Rightarrow \perp} \\
 \frac{\uparrow, \sqrt{5} = -\frac{a+c}{b-d} \Rightarrow \perp}{\uparrow, (b-d)\sqrt{5} = -a+c \Rightarrow \perp} \\
 \frac{\uparrow, b\sqrt{5}-d\sqrt{5} = -a+c \Rightarrow \perp}{\uparrow, b-d \neq 0 \Rightarrow \perp} \\
 \frac{\uparrow, b \neq d \Rightarrow \perp \text{ (等号の性質)}}{<1>}
 \end{array}$$

$$\begin{array}{c}
 \frac{a \neq c, a=c \Rightarrow \perp}{\uparrow, 0 = -a+c \Rightarrow \perp} \\
 \frac{\uparrow, (b-d)\sqrt{5} = -a+c \Rightarrow \perp}{\uparrow, b\sqrt{5}-d\sqrt{5} = -a+c \Rightarrow \perp} \\
 <1> \quad \uparrow, b=d \Rightarrow \perp \\
 \frac{\Gamma, a+b\sqrt{5}=c+d\sqrt{5}, a \neq c \Rightarrow \perp \text{ (場合分け)}}{<2>}
 \end{array}$$

(2.2) (cut)を用いて(2.1)の冗長部分を減らした証明図:

$$\begin{array}{c}
 \frac{b \neq d, \sqrt{5} = -\frac{a+c}{b-d}, \sqrt{5} \in \mathbb{Q}, -\frac{a+c}{b-d} \in \mathbb{Q} \Rightarrow \perp}{\uparrow, \sqrt{5} = -\frac{a+c}{b-d} \Rightarrow \perp} \quad \frac{0 = -a+c \Rightarrow a=c}{\uparrow \Rightarrow a=c} \\
 \frac{\uparrow, b \neq d \Rightarrow \perp}{\uparrow \Rightarrow b=d \text{ (RAA)}} \quad \frac{\uparrow \Rightarrow a=c \quad \uparrow \Rightarrow b=d}{\uparrow, b=d \Rightarrow \downarrow \text{ (}\wedge\text{右)}} \\
 \frac{\uparrow, (b-d)\sqrt{5} = -a+c \Rightarrow \downarrow \text{ (cut)}}{\uparrow, b\sqrt{5}-d\sqrt{5} = -a+c \Rightarrow \downarrow} \\
 \frac{\Gamma, a+b\sqrt{5}=c+d\sqrt{5} \Rightarrow a=c \wedge b=d}{\Gamma, a+b\sqrt{5}=c+d\sqrt{5} \Rightarrow a=c \wedge b=d}
 \end{array}$$

(2.3) 対偶の性質を用いた証明図:

※<1>, <2>は(2.1)の証明図と同じものとする。

$$\begin{array}{c}
 <2> \\
 \frac{<1> \quad \uparrow, a+b\sqrt{5}=c+d\sqrt{5} \Rightarrow \perp}{\uparrow, b \neq d \Rightarrow \downarrow \text{ (RAA)}} \quad \frac{\uparrow, a+b\sqrt{5}=c+d\sqrt{5} \Rightarrow \perp}{\uparrow, a \neq c \Rightarrow \downarrow \text{ (RAA)}} \\
 \frac{\uparrow, b \neq d \vee a \neq c \Rightarrow a+b\sqrt{5} \neq c+d\sqrt{5} \text{ (}\vee\text{左)}}{\Gamma, a+b\sqrt{5}=c+d\sqrt{5} \Rightarrow a=c \wedge b=d \text{ (対偶の性質)}}
 \end{array}$$

(3) 比較・考察:(2.2)で場合分けの代わりに(cut)を使うことで、すっきりとした分かりやすい証明図になった。また、(2.3)の対偶の性質を用いた場合は、その後背理法を用いている。これは(2.1)の遠回りした形で、簡潔ではないと考える。

4 おわりに

本研究では、様々な証明を証明図で表現した。対偶の性質や背理法を用いることで、証明しやすくなることもあり、それらの理解を深めることは有効だと考える。特に背理法は、対偶の性質を用いることができない命題にも用いることができ、また複数のタイミングで用いることで複数の自然な証明を得ることができ、汎用性が高いことが分かった。

参考文献

- [1] 佐々木克巳, 2019 年度「数理論理学」講義資料, 南山大学, 2019
- [2] 佐々木克巳, 「シーケントによる証明の構想の図式化」, 教職センター紀要第2号, 南山大学教職センター, pp. 46-60, 2017
- [3] チャート研究所, 『新課程 チャート式 基礎からの数学I+A』, 数研出版株式会社, 東京, 2014
- [4] 俣野博・河野俊丈 ほか 27 名, 『数学 I』, 東京書籍株式会社, 東京, 2014